

論文要旨

研究の目的

がんの診断を受け、治療や療養生活の中で、今後の見通しが立たないことや命が続いていくことが危ぶまれるなど、自分のいのちについて不確かな状態の中にいる患者に、どのような支援が行われているか明らかにする。また、その結果をふまえて、CNS 実習での学びとの統合を考察し、リエゾン精神看護専門看護師として自分のいのちについて不確かな状態の中にいる患者への今後の看護実践に対する示唆を得ることを目的とする。

方法

文献検索には医学中央雑誌 web 版および PubMed を用いた。「がん告知」「看護ケア」「Neoplasms」「Diagnosis」「Uncertainty」「Nursing intervention」を検索キーワードとして使用し、がんの診断や病名告知を受けた方の事例研究・介入研究の検索を行った。がんの診断を受け、治療や療養生活の中で、自分のいのちについて不確かな状態の中にいる患者に行われた支援について、実際にどのような看護ケアが行われているかについての記述を抽出し、その内容を特徴ごとにカテゴリー化して整理・統合した。

結果

文献検索の結果、51 件が採用された。いのちの不確かな状態の中にいる患者に行われた看護ケアは、【支持的介入】【教育的介入】【意思決定支援】【環境調整】【家族との協働】【身体症状とその影響を受ける生活への介助】【多職種連携】【上級実践看護師による介入】であった。

結論

患者はがんについての知識や情報が不足していること、療養の経過が予測できないことから、病気の深刻さへの不安や人生への影響、夢をかなえることができるのかということへの不確かさを抱えている。また、そのいのちの不確かさを不安や抑うつで感情で抱えている。看護師は Mishel の示した不確かさの概念モデルによる「構造提供者」として、教育やソーシャルサポートの調整、また信頼できる専門家として存在することができる。

いのちの不確かさを抱える患者への看護は、衝撃を受けた患者を支え、情報提供や環境調整により患者を強め、患者が適応していくことができるように支援していくことであると考えられる。また、精神看護専門看護師による上級看護実践としては、精神状態のアセスメントと調整などの介入や、ストレスマネジメントや認知行動療法的アプローチについて

のプログラムドケアの提供が求められていると考える。